第2部「江戸城の経営と消費」開催趣旨

江戸城に関する研究史を、紙数の制約下において誤解を恐れずに整理すれば、江戸城それ自身に関する研究、あるいは江戸城という場で展開した将軍と諸大名たちとの儀礼的な関係のあり方に研究上の関心が集中していた、と総括して大過ないものと考える。戦前以来の蓄積を有する城郭史研究と、これをベースとしつつも建築史・考古学・美術史などといった諸分野の研究成果を包含した広義の城郭史、またこれと深く関係しつつ展開した天下普請、都市計画史、江戸城を舞台に繰り広げられていた政治的儀礼や御殿の空間構成、大奥の制度などの研究によって占められていたからである。他方で、70～80年代の都市史研究は、西山松之助を中心とする「江戸町人研究会」に集う人々によって進展してきた経緯をもつ。そこでは研究会の名称が示すとおり、江戸っ子論・町人階層論、問屋仲間や御用達商人といった商人研究、町役人や町奉行といった町政研究等々、町人・町方を主眼においた都市史研究が展開していたが、江戸城への関心は全くみられなかった。

これに対して、80年代後半以降、近世考古学の研究とともに進展してきた武家地研究は、都市史研究の全体性に寄与するばかりでなく、重要な都市史研究の方法論をも生み出していった。なかでも大名屋敷、大店、寺院、市場などをひとつの磁場にたとえ、都市を構成する不可欠の構成単位として析出した吉田伸之の研究視角は、武家研究、町人研究、寺社研究といったそれぞれの研究分野の垣根を取り払い、流通史や商業史とは異なる都市史研究固有の方法論を提示し、その後の多様な都市史研究の飛躍的な発展に筋道を与えた。

このように江戸城と江戸に関する研究史を見渡してみると、80年代以降においても江戸城研究と江戸研究の並立状況がまったく放置されたままになっているのに気づかされる。しかし、江戸城こそ巨大都市江戸における最大の磁場ではなかったのか、江戸城を一個の生命体に例えるとすると、江戸城は、その生命を維持するため、巨大都市江戸という社会のなかにどのように根を張りめぐらせて生存していたのか、都市史としての江戸城研究の重要性を痛感せざるをえない。こうした研究状況下にあって注目すべきは、第12回国際経済史学会の「経済制度としての宮廷」部会で報告をした大口勇次郎の研究「消費者としての江戸城」(『お茶の水史学』45号、2001年）である。大口自身の整理に拠れば、この部会の課題意識は「宮廷の経済的・財政的組織、経営のシステム、消費のモデル、再分配の機能、宮廷経済が都市経済に与えた影響等々を分析の指標として、各国の宮廷経済を比較検討しようとするもの」であったという。ここでの課題意識を江戸と江戸城にあてはめれば、まさに都市史研究の一環として江戸城研究を位置づけようとするものであったといえるのであるが、「国家財政とは独立の徳川『宮廷』の家産や家計経済、都市江戸に与えた江戸城の経済的役割、あるいは江戸城の消費モデル等々の諸点については、残念ながら十分な説明を施すことが出来」なかったと自ら総括されているように、こうした研究はようやく緒についたばかりなのである。

そこで巨大都市江戸の不可欠の構成単位であり、都市社会の構成に大きな影響力を及ぼした巨大な消費主体であった江戸城、都市住民にとって稼ぎ場であった江戸城の実態解明を明確に意識した研究を、新しい研究動向として確立することをめざして今回のシンポジウムを組織した。シンポジウムの当日は、大口勇次郎の問題提起を第１報告に据え、将軍の個人的な消費をつかさどる御用取次見習の記録「年番取扱覚」を分析した松尾美恵子報告、江戸城における儀礼において大量に消費された生鯛調達の実態を論じた太田尚宏報告、人宿によって請け負われた江戸城大手門の警衛の実態を論じた市川寛明報告、江戸城の経営に不可欠の役割を果たしていた下働き役人の実態を論じた田原昇報告の各論を揃えた。今回のシンポジウムが「江戸城の経営と消費」をめぐる新しい研究の出発点となれば幸いである。　（文責・市川寛明）